

ジェームス・グリーン著、篠田徹訳  
『歴史があなたのハートを  
熱くする

—運動をよみがえさせなければ  
忘れてしまった闘いの過去を思い出せ』

評者：高須 裕彦

本書は、マサチューセッツ州立大学ポストン校地域公共サービス学部の歴史学教授で、同学部のレイバー・スタディーズ・プログラムとレイバー・リソース・センターのアカデミック・コーディネーターをつとめるジェームス・グリーン(James Green)氏の原著 *Taking History to Heart The Power of the Past in Building Social Movements* (2000年刊)の抄訳であり、原著の10章の内、4章が翻訳掲載されている。

著者は、自分史を振り返りながら、60年代の学生運動、運動史との出会い、労働組合と労働教育、歴史家と活動家知識人としての役割、社会的労働運動としてのアメリカ労働運動の再生への展望を描いている。具体的個人を通してアメリカ労働運動の現段階を知ることのできる好著である。訳者の翻訳もまた口語体で大変読みやすく、著者と同時に訳者の熱意が伝わってくる訳文である。

95年に、ジョン・スウィニーらニューボイスグループ(改革派)がAFL-CIOの指導部を掌握して以来、アメリカ労働運動の再生が日本でも議論されてきた。その一端は、戸塚秀夫氏らが翻訳されたグレゴリー・マンツイオス編『新世紀の労働運動：アメリカの実験』(緑風出版)やケント・ウォン編『アメリカ労働運動の

ニューボイス—立ち上がるマイノリティー・女性たち』(彩流社)で具体的に紹介されてきた。これらの議論を踏まえつつ本書を読まれると、さらに改革派に属する人々の思想と運動をより深く理解できるだろう。

## 1 本書の構成と内容

本書は以下の通り構成されている。

訳者からはじめに

日本の読者へ

第1章 運動史を活かす

第2章 労働者にどうやって運動史を教えた  
らいいかを学ぶ

第3章 マサチューセッツ労働史における連  
帯のときを記念する

第4章 運動史から運動へ

各章の概要は以下のとおりである。

### (1) 運動史を活かす(第1章)

ブルーカラーの祖父や隣人たちと育った生い立ち、60年代後半の学生運動から運動史との出会い、活動家知識人としてのあり方、歴史家の役割へと話が進む。

イエール大学の大学院生であった1967年、同世代の若者たちと同様に、学生運動とベトナム反戦運動に没頭する。その年、ニュー・オルリンズへ赴き、コンビントン・ホールという詩人でラディカルな活動家の回想録『米国最南部における労働者の闘い』を見つけ、貧しい白人と黒人労働者たちが共に闘った物語を通じて「世界産業労働者同盟」(IWW)の運動を知る。これを出発点に、ポピュリズム、革新主義、フェミニズム、社会主義といった20世紀はじめのラジカル・アメリカの思想に影響された「公共的知識人」としてあった数々の革新系歴史家たちの存在を知る。そんな歴史家の一人ヴァン・

ウッドワードに大学院で直接教えるを受ける。そして、旧左翼の単純な歴史理解に反駁していた新左翼の隊列に加わる。

「人々を感動させるパワフルな運動物語を発見したあと、今度はそれらをどうやって人々に伝えるか試行錯誤することとなる」。大学院を出て、労働者教育にかかわり、「その毎日が日々労働運動の実践の中から学生が繰り出してくる質問と自分が知っている歴史的知識をつなげる挑戦の連続であることを思い知らされる」。こういった「労働運動の活動家がいてくれたからこそ」、「ただの応援団ではなく、教師としてまたもの書きとして闘う労働者にかかわりあう活動家知識人になりたいと願い続けることができた」という。

「運動にとって多くの向かい風が吹くいまの時代」の歴史家にとっての大切な役割は、「運動史のなかに失われた記憶を回復し忘れられた場所を思い出すことである、声なき声を書き留め悲劇を繰り返し伝える役割である」と、かれは主張する。これが本書の主要なテーマでもある。

(2) 労働者にどうやって運動史を教えたらいいかを学ぶ(第2章)

イギリスでの経験と労働者教育の様々な試行錯誤が語られる。

1975年から2年間、イギリスの「ワーウィック大学」の社会史研究センターでアメリカ労働史を教え、労働者教育の殿堂「ラスキン・カレッジ」で労働者教育の歴史を振り返るワークショップに参加する。そこでかれは、イギリスの活気に満ちた労働者教育と出会い、戦闘的な労働者たちとラディカルな教師たちから様々なことを学んで帰国する。

アメリカの労働組合は、伝統的に反知識人感情を持ち、ボストンで労働者と組合にかかわり

はじめた頃は、うさん臭そうに見おろす壁が立ちだかっていた。労働運動の中に仲間を見つけようという努力の結果、しだいに、組合や地域の若い末端活動家たちとの出会いがはじまり、ボストン・コミュニティ・スクールとカトリック労働宣教師団での労働者教育の機会を与えられ、マサチューセッツ州立大学ボストン校が立ち上げた実験的な成人教育学部、地域公共サービス学部での非常勤講師の仕事が舞い込んでくる。そこでかれは広く運動史を実践する機会をえ、労働者・活動家たちと互いに学びあえる教育の解放区をつくっていく。

80年代、全国の労働者教育の状況は様変わりする。「冷戦時代の労働運動を支えた労働者教育の『守旧派』は60年代の社会運動と成人教育の民主化をめざした大衆的な教育運動に影響された新しい世代の労働者教育の担い手にその席を譲」る。その「もっとも重要なケースが1987年に起きたハーバード・トレード・ユニオン・プログラム(TUP)」であるという。そこで労働史を教えることとなる。かれは、ブラジルの民衆教育者「パウロ・フレイレの提唱した生徒に問題を投げかけて問答のなかでかれらの考えを开花させていく教育的対話の方法を試してみる」。どんな意見もみんなのでいえるようにクラスを「民主化」し、いっしょに考える学習コミュニティをつくっていく。

(3) マサチューセッツ労働史における連帯のときを記念する(第3章)

「ヒストリー・ワークショップ」の実践例が語られる。

1976年にイギリスで、「ヒストリー・ワークショップ」という大学の歴史研究と教育を労働者に開かれたものにしてと研究者と体験者そして関心のある人たちが一堂に会して対等の立場で過去について議論する感動的な場に出会っ

た。これが求めていたものだと確信したかれは帰国後、仲間の研究者を集めて、「マサチューセッツ・ヒストリー・ワークショップ」を実現し、過去の先輩たちの闘いの経験をいまの運動の糧としようとしてやってきた活動家とともに過去を振り返る。続いて、労働運動と女性運動の関係を問い直す「婦人労働組合同盟」創設80周年記念集会、合衆国の労働史で物議をかもしてきたメーデーを現代的に取り上げる「労働運動は覚えている：8時間労働ストライキ100周年」の開催、食品労組の50年代のストライキと現代のボストンの食品工場閉鎖反対闘争とをつなぐ「ヒストリー・ワークショップ」を開催していく。

#### (4) 運動史から運動へ（第4章）

最後の章では、新しい労働運動への展望が語られる。

労働運動が組織化を忘れ、「1980年代に労働運動が崩壊の危機に陥ったときに、運動史家たちは」「組合活動家たちに『社会運動としての組合の歴史』を思い出させようとした」。変化の兆しは1987年の「仕事に正義を！（Job with Justice）」を結成したときにはじまる。組合内反対派や組合民主化グループは、幹部批判の声を上げていく。急速に拡大する民間のサービス、事務、販売従事者など新しい労働者、女性、非白人、最近移民してきたグループの組織化が焦点となり、新しい組織化の仕方が問われる。地域コミュニティ、教会や諸団体との連合、そこから出てくる生活賃金キャンペーン、そして「コミュニティ・ユニオンイズム」の可能性が議論される。

80年代の「労組に敵意をむき出しにする経営者や政府の猛攻は、結果として古い慣習を打ち破ろうとする新しい世代のユニオンリーダーたちをローカル、州、全国のレベルに登場させ

た。95年、AFL-CIOにおいて、SEIUのスウィニーが、「ニューボイス」チームを率いて会長選挙に勝利し、ついに保守派を追い落とす。

かれは、ジェレミー・ブレッヒャーとティム・コステロの言葉を引用して、「『労働者を本当に活性化するなら、組合の末端における草の根の活動がアメリカの組合に長く封印されてきた厳格な官僚統制に取って代わる、社会的労働運動に向かわざるをえない』ことだけは確かである」という。

「たくさんの障害にぶつかりながら、労組は学生運動の活動家や作家、芸術家を引きつけ、また教会関係者のなかに多くの味方を獲得し、大学では組合シンパの教授たちが学生と労働運動を語る集会を催したり、労働教育の世界で長く行われてきた組合活動家とかれらを支援する知識人とのあいだの対話に、より多くの人びとを巻き込みながら、ふたたび社会運動らしくなる道を歩み始めた。」「女性やとりわけ白人以外の労働者は労働運動に強い関心を示している。」「もし組合がこれらの低賃金労働者の住む地域で確固たる存在となり、地域ぐるみの組織を作り上げ、その組織を新しいリーダーに開放するならば、」「1930年代に組合が貧困から抜け出る道であり、生活の手段を奪われた公民権さえ剥奪された人たちがまっとうな市民となることをめざす人びとの希望となったころの姿を、ふたたび取り戻すことができるだろう」と展望を語る。

## 2 本書から学んだこと

以上、本書の紹介が長くなってしまったが、以下考えさせられた点を指摘したい。

### (1) 労働運動と大学の研究者との関係

まずは、アメリカと日本の大学の「労働研究」や「労働研究者」のあり方の大きな違いで

ある。ジェームス・グリーンは、労働運動史の研究者であると同時に、「労働教育者」であり、「活動家知識人」である。労働現場で日々苦闘している労働者や活動家たちと労働教育の現場で対等に向き合う中で、活動家知識人であり続けている。アメリカにおいては、第2次世界大戦後、労働教育が大学において大きく広がり、80年代以降は改革派労働運動とも密接なつながりをもって行われている。かれ自身が大学の労働教育において、労働運動の活動に生かせる運動史を活動家との対話的方法によって教えている。60年代の公民権運動や学生運動が大きなインパクトを持って、大学のあり方、労働教育のあり方を変容させ、その後もコミュニティや社会運動団体、労働組合が働きかけを続けて、もちろん学生運動も存続して、大学教育のあり方を変革していったのではないと思われる。それと対照的に、日本の大学においては、「労働研究者」はいても、「労働教育」も「労働教育者」も存在しない。60年代学生運動の結末は、学生運動が消滅し、大学の管理が強まり、社会との関係は、産業界との関係が強まりこそしても、労働組合や地域・社会運動との関係は事実上存在しなかった。大学のあり方に規定されて、「研究者」個人と活動家・労働組合との関係もまた対等に学び合う関係ではなかった。大学の研究者と活動家たちがまったく別の世界にいるのではなからうか。それが日本の労働研究の閉塞状況を生み出している一因ではないか。私自身、労働運動の現場で苦闘し、かつ大学の中をのぞく機会をもち、良心的な研究者たちと議論を闘わせた者として実感として感じる点である。

現在、私は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校労働研究教育センターに滞在しながら、スタッフたちと日々接触し、かれらの仕事を見聞きし、様々な活動に参加しながら、大学のレイバーセンターとは何かを考えている。今年4月

の中旬には、全米労働教育協会(UALE)の総会に参加し、全米から集まってきた「労働教育者」たちと触れ合う機会も得た。それらを通じて気づいた点は、ジェームス・グリーンのような存在は決して例外ではないと言う点だ。大学の労働教育者の目線は非常に低い。現場に出て行って、組合活動家と相互交流をし、組織化や協約キャンペーン戦略を提起し、実践レベルで、相互議論・相互協力をしている。大学のレイバーセンターはそのために、調査研究をし、オルグや組合員の教育にかかわり、もっている資源を組合に全面的に提供している。労働運動の活動家も、大学院へ行き、レイバーセンターのスタッフにもなり、大学と運動現場を頻繁に行き来している。こういったあり方を学びながら、日本でも、大学と言わないまでも、せめて個別研究者複数と労働運動との新たな関係がつかっていけないだろうか。

## (2) 運動史から学び、生かすこと

二つ目は、運動史から学び、それを現在の運動に生かすこと、その具体的な実践手法としての「ヒストリー・ワークショップ」についてである。日本であまり活用されていない手法ではないか。労働運動史上様々な記念すべき争議や闘い、あるいは地域での闘いがあるはずだが、研究者、経験者、労働者や活動家が一堂に会して議論したことは、私の経験上はない。先に述べた全米労働教育協会(UALE)の総会(シカゴで開催)でも、「レイバーヒストリーツアー」が取り組まれ、メーデーの発祥地として、1886年にシカゴの労働者たちが8時間労働制を要求して闘った現場を見て回り、その闘いの歴史を聞いた。その案内役は、研究者ではなく、地元労働運動の活動家であった。120年前の闘いを振り返りながら、現在の長時間労働を考えてみる。今日、状況が困難であればあるほど、

ジェームス・グリーンという「忘れてしまった闘いの過去を思い出せ」ということが問われる。日本でも研究者と活動家の共同作業として具体化を考えてみるべきであろう。

(3) 今後の展望－組織化と社会的労働運動  
三つ目は、今後の展望である。ジェームス・グリーンは、女性や移民労働者たちの組織化、コミュニティ・ユニオニズムの可能性、社会的労働運動としての方向性を提起している。問題は政府や経営側のスピードをこえる早さで、これらを実践し、組織化を実現していけるかどうかだろう。

現在ロサンゼルスに滞在し、アメリカ社会と労働運動の一端を見ていると、アメリカにはとてつもない貧富の格差が存在し、新しい移民たちの世界は第三世界そのものである。富裕な白人有産階級と非白人労働者階級の対立は深刻である。しかし、労働組合やコミュニティの活動家、草の根の労働者たちは日々動き回り、抵抗し、権利を勝ち取るために闘っている。かれらは展望を持って創意工夫をしながら生き生きと

力強く闘っている。80年代の困難な状況を乗り越え、改革派がリーダーシップを取ることで反転攻勢をかけている。

さて、そのことは多少状況が違えども日本にも同様のことを示唆している。今後への展望は、正社員の企業内特権を防衛するだけの「企業内組合」を脱して、非正規労働者や未組織労働者、外国人労働者とつながる労働組合として、権利要求を掲げ、「社会的労働運動」として再構築していく道しかないだろう。小さいながらもその実践は各地で始まっている。ただ、実践への道は困難ではあるが、魅力ある課題ではないか。(ジェームス・グリーン著、篠田徹訳・解説『歴史があなたのハートを熱くする－運動をよみがえさせたければ忘れてしまった闘いの過去を思い出せ』発行：社団法人教育文化協会、販売：株式会社第一書林、2003年6月30日刊、149頁、定価2,381円＋税)

(たかす・ひろひこ カリフォルニア大学ロサンゼルス校労働研究教育センター客員研究員、法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員、前全国一般労働組合東京南部書記長)